

高校生のみた「アートによるまちづくり」と中心商店街 —十和田市高校生への質問紙調査から（1）—

How High-school Students see and evaluate the “Art-based Urban Development” and Central Shopping Street Results from a Questionnaire Survey for Second-year Students at High Schools in Towada City

高 瀬 雅 弘*
Masahiro TAKASE*

要 旨

本稿は、青森県十和田市の4つの高等学校の生徒たちが「アートによるまちづくり」とどのような接点を持ち、それをどのように受け止めているのか、またそうした施策のもとで変化する中心商店街といかにして関わり、そこに何を望んでいるのかについて考察する。具体的には、調査時点での2年次生徒を対象とした質問紙調査に基づき、アートに触れることによって生じる変化、市が進めるまちづくりに対する評価、中心商店街の利用状況や変化に対する認識、要望や今後のまちとの関わり方に対する展望といった点について明らかにする。これらの作業を通して、今後の中心市街地活性化やまちづくりに高校生が関わっていくうえでの課題を提示する。

キーワード：中心市街地活性化 まちづくり 中心商店街 高校生 現代アート

1. はじめに

（1）問題の所在と本稿の目的

地方都市の中心市街地の衰退が論じられるようになって久しい。「危機」ということばが使い古され、もはやさほどのインパクトをもたないような気がするほどに、シャッターの下りた店舗、まばらな通行客といった光景がなかば当たり前のようになってきている。もちろん商店街の人々もそうした状況を座視しているわけではない。知恵を集め、様々な取り組みが行われている。

本稿の分析対象である青森県十和田市の中心市街地もまた、そうした取り組みを進める地域のひとつである。十和田市は「アートによるまちづくり」を掲げ、十和田市現代美術館（2008年4月開館）を嚆矢として、「まちなかアート」の展開など、積極的な事業を進めている。

その一方で、十和田市は4つの高等学校が立地する、若者の多いまちでもある。このことは潜在的な、

また将来的なまちの担い手を、比較的豊富に擁していることを意味する。この2つの要素を関連づけながら、十和田市における中心市街地の活性化のありようを捉えてみよう、というのが、本稿のねらいである。

「アートによるまちづくり」のもとで大きく広がった芸術に接する機会を高校生たちはどのように活用しているのか。商店街活性化のための取り組みはどのように受け止められているのか。そして彼ら彼女らは変化する地元の中心商店街をどのように捉え、何を求めているのか。これらが本稿の問題関心である。そのうえで、今後のまちづくりのあり方を考えるうえでの課題を提示することを目的とする。

（2）先行研究の知見

中心商店街の活性化について、様々な視点からの研究が重ねられるなかで、近年高校生の意識や関わり方について考察した研究が蓄積されている。

土屋・濱田（2005）は、和歌山県和歌山市・海南市をフィールドに、大学生の少ない地方都市において、

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

中心市街地を利用する若者としての高校生に焦点を当て、来街理由やまちに対する魅力の感じ方、さらには情報伝達の手段の実態を明らかにしている。また平川(2012)は、新潟市中心市街地を対象に、高校生がまちに対して抱いている魅力度の潜在的な高さを示している。

山形県酒田市をフィールドとした仲川(2010)の研究は、地元高校生の中心市街地の利用実態や抱いている印象、高校生が求める市街地のあり方や、将来の居住意思といった点について分析している点で、本稿の問題意識にとって重要な先行研究である¹。また、女子高生を対象とした分析のキーワードである“おしゃれ”や“カワイイ”は、本稿が取り上げる十和田市の「アートによるまちづくり」における、アートがもたらすイメージを考察するうえでも示唆を与えてくれる。

熊本県八代市の中心市街地活性化と高校生の意識を捉えた松田他(2011)や澤田(2012)は、高校生の生活時間(帰宅時間)と中心商店街の利用の関係性や情報行動を捉え、高校生が中心商店街と関わるための方途を探っている。とりわけ後者は、空間としてのアーケードに注目した研究として、長大なアーケードを有する十和田市の中心商店街について考えるうえで有益な視点を提供してくれる。

これらの先行研究が本稿にもたらす示唆は大きい一方、一方でこれまで十分に検討されていない点も残されているように思われる。それは行政の側が進めるまちづくりを、高校生たちがどのように受け止めているのかということである。既存のまちのあり方だけではなく、新たな取り組みに彼ら彼女らがどう向き合っているのか、具体的には「アートによるまちづくり」は高校生たちにどのように受容されているのか(あるいは受容されていないのか)という点について、本稿は考察していく。

(3) 分析課題

本稿では、上記の問題関心にに基づき、次のような分析課題を設定する。

まず現代美術館と高校生の接点をめぐる課題として、次の3つの問いについて考察する。

第一の問いは、高校生たちは現代美術館を拠点とした一連のアートとどのような接点をもっているのか、ということである。第二に、アートに触れる機会というものが、彼ら彼女らにいかなる影響を与えているのか、ということである。そして第三に、高校生たちは

市が進める「アートによるまちづくり」に対していかなる評価をしているのか、ということである。

次に、中心商店街やまちとの関わりについては、4つの問いを設定して考察する。

第一に、高校生たちは中心商店街とどのような関わりをもち、そしてどのように利用しているのか、ということである。第二に、彼ら彼女らは、「アートによるまちづくり」がもたらす中心商店街の変化をどのように捉えているのか、ということである。第三の問いは、高校生たちが中心商店街に何を望み、どのような現状改善策を考えているのか、ということである。そして第四に、十和田市に居住する高校生たちは、地元であるまちをどのように感じ、将来どのように関わっていこうとしているのか、ということである。

2. 対象と方法

(1) 事例の概要

青森県十和田市は、青森県南地方の内陸部に位置する、人口約6万4千人²の市である。幕末期の三本木原開拓によって大きく発展し、三本木村で建設が行われた新町が現在の中心市街地の原型をなしている。稲生町を中心とする商店街地区は、戦後上北地区の中心的な商業地として発展し、1960年代には旧国道4号線沿いに全長1kmにもわたる長大なアーケードが建設された。しかし1990年代以降、百貨店の閉店や郊外型ショッピングセンターの進出により、商店街の衰退が急速に進んだ。

このような状況のもとで、中心市街地の活性化を目的として「十和田市中心市街地活性化基本計画」が2010年3月に策定され、2008年4月に開館した十和田市現代美術館を軸に「アートによるまちづくり」が進められ、今日に至っている。

同市には4つの公立高校が立地し、十和田市内はもちろんのこと、近隣の三沢市、おいらせ町、七戸町、東北町、五戸町、六戸町などからも通学する生徒がいる。また寄宿舎を設置する高校も1校あり、こちらには県内各地から生徒が集まっている。

(2) 調査方法と対象者

調査名を『「十和田の街と高校生のライフスタイル」に関するアンケート』として、調査票を各高等学校に持参し、ホームルーム等の時間を利用しての配付・回収を依頼した(集合調査法)。調査票の配付は2012年11月9日および16日に行い、11月30日までにすべての

調査票を回収した。

調査対象は十和田市内の4つの高等学校に在籍する2年生(2012年度)全員である。回収したのは671票であり、うち有効票数は668票であった。回収率はそれぞれA高校(230票/238名=96.6%)、B高校(67票/68名=98.5%)、C高校(189票/195名=96.9%)、D高校(185票/198名=93.4%)である。学校別・性別の対象者の内訳は表1のとおりである(性別不明者を除く)。

4つの高等学校はそれぞれA高校=普通科、B高校=普通科と職業科、C高校・D高校=職業科である。ただし本稿では分析の都合上、B高校の生徒はすべて普通科として取り扱っている。

表1 対象者の内訳

	性別		合計	N
	男子	女子		
A高校	47.6%	52.4%	100.0%	229
B高校	25.4%	74.6%	100.0%	67
C高校	94.7%	5.3%	100.0%	188
D高校	58.0%	42.0%	100.0%	181
合計	61.5%	38.5%	100.0%	665

3. 高校生とアートの接点

(1) 現代美術との関わり

十和田市の高校2年生の十和田市現代美術館の訪問経験は全体では59.0%である。

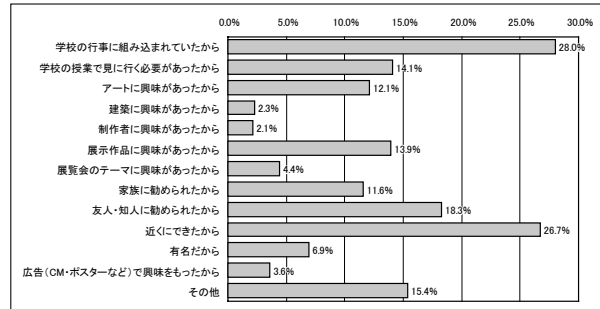
まず性別ごとにみると男子47.4%(194人/409人)、女子77.0%(197人/256人)と、大きな違いがみられる。次に学校ごとにみるとA高校76.5%(176人/230人)、B高校92.5%(62人/67人)、C高校42.3%(80人/189人)、D高校41.8%(76人/182人)と、学校によって割合は異なっている。なお性別ごとの差異を学校ごとにみた場合、B高校を除く3校では統計的に有意な差がみられた。

こうした学校ごとの美術館訪問経験の違いは、最初の訪問のきっかけによるものと考えられる。現代美術館を最初に訪問したきっかけ(複数回答)は図1のとおりである。

ここでは「学校の行事に組み込まれていたから」が最も高く28.0%、次いで「近くに来たから」26.7%、「友人・知人に勧められたから」18.3%、「その他」15.4%、「学校の授業で見に行く必要があったから」14.1%、「展示作品に興味があったから」13.9%となっている。

これらの理由を学校ごとにみると「学校の行事に組み込まれていたから」はA高校32.6%、B高校41.7%に対しC高校、D高校ではそれぞれ17.9%、17.1%であり、また「学校の授業で見に行く必要があったから」はA高校15.4%、B高校33.3%に対しC高校3.8%、D高校5.6%となっている。それ以外の理由については学校ごとに統計的に有意な差はみられなかった。

図1 最初の現代美術館訪問の理由(複数回答)



もちろんこのような相違は高校の環境にのみ規定されているわけではない。現代美術館の開館は2008年4月であり、彼ら彼女らが中学校1年生になった時点のことである。したがって学校の行事や授業の一環での美術館訪問は中学生の時分に行われた可能性もある。質問紙調査では中学校の所在地を直接尋ねてはいないが、現住所(十和田市内在住・市外在住)がある程度の代替指標となろう。

そこで市内在住・市外在住別、学校別に美術館訪問

表2 居住地別・学校別の美術館訪問経験の有無

		美術館訪問経験		合計	N
		あり	なし		
十和田市内	A高校	85.1%	14.9%	100.0%	154
	B高校	92.4%	7.6%	100.0%	66
	C高校	60.2%	39.8%	100.0%	108
	D高校	56.0%	44.0%	100.0%	116
	合計	72.5%	27.5%	100.0%	444
	カイ2乗検定	カイ2乗値49.350	有意確率0.000		
十和田市外	A高校	58.7%	41.3%	100.0%	75
	C高校	17.5%	82.5%	100.0%	80
	D高校	15.4%	84.6%	100.0%	65
	合計	30.9%	69.1%	100.0%	220
	カイ2乗検定	カイ2乗値41.131	有意確率0.000		
合計	A高校	76.4%	23.6%	100.0%	229
	B高校	92.4%	7.6%	100.0%	66
	C高校	42.0%	58.0%	100.0%	188
	D高校	41.4%	58.6%	100.0%	181
	合計	58.7%	41.3%	100.0%	664
	カイ2乗検定	カイ2乗値104.470	有意確率0.000		

表3 十和田市内在住者の学校別の学校行事・授業による美術館訪問

	学校行事		合計	N	学校の授業		合計	N
	該当	非該当			該当	非該当		
A 高校	31.5%	68.5%	100.0%	130	12.3%	87.7%	100.0%	130
B 高校	42.4%	57.6%	100.0%	59	33.9%	66.1%	100.0%	59
C 高校	14.3%	85.7%	100.0%	63	4.8%	95.2%	100.0%	63
D 高校	16.9%	83.1%	100.0%	65	6.2%	93.8%	100.0%	65
合計	27.1%	72.9%	100.0%	317	13.6%	86.4%	100.0%	317
カイ2乗検定	カイ2乗値16.895 有意確率0.001				カイ2乗値28.189 有意確率0.000			

経験をみても（表2）、市内在住の生徒、市外在住の生徒双方において学校による差異があることがわかる。

また十和田市内在住者について学校行事・授業を最初の訪問理由に挙げた生徒の割合をみても（表3）なお学校による差異がみられることから、美術館訪問にはやはり高校による違いが表れていると考えてよさそうである。

美術館訪問経験がある生徒のなかでの学校別の訪問回数の分布は表4のとおりである。

表4 学校別の美術館訪問回数の分布

	訪問回数				合計	N
	1回	2～5回	6～9回	10回以上		
A高校	34.5%	59.3%	4.5%	1.7%	100.0%	177
B高校	17.7%	77.4%	4.8%	0.0%	100.0%	62
C高校	55.7%	40.5%	3.8%	0.0%	100.0%	79
D高校	36.8%	56.6%	3.9%	2.6%	100.0%	76
合計	36.5%	57.9%	4.3%	1.3%	100.0%	394
カイ2乗検定	カイ2乗値25.718 有意確率0.002					

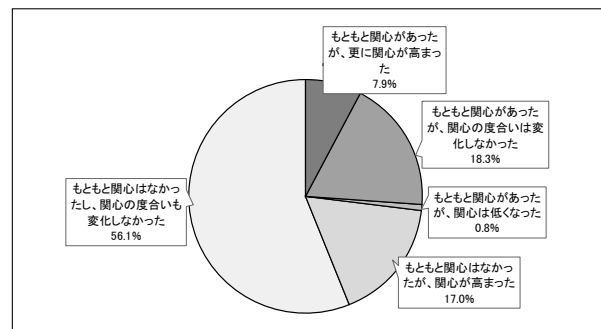
全体では2～5回が57.9%、1回が36.5%、6～9回が4.3%、10回以上が1.3%となっている。美術館を訪れたことがある生徒の3分の2近く、対象者全体でも37.4%の生徒が複数回の訪問経験をもっていることになる。その背景には現代美術館の入館料が高校生以下無料となっていることがあると考えられる。このことは美術館が高校生によって比較的気軽に立ち寄れる場であることを意味している。それを裏づけるように、美術館訪問の最初のきっかけのなかで「その他」を選択した生徒の自由記述には、「暇だったから」「暇つぶし」「なんとなく」「無料だから」といった回答が多くみられる。十和田市現代美術館は、地元の高校生にとって比較的敷居の低い存在であるといえるだろう。

（2）芸術に対する関心の変化

上にみたように、現代美術館は高校生にとってなじみやすい場所となっている。では彼ら彼女らの身近にある現代美術は、芸術に対する意識にどのような影響を与えているだろうか。

現代美術館の開館やまちなかアートの整備による美術への関心の変化は図2のとおりである。

図2 美術への関心の変化



美術に対する関心は変化しなかったとする生徒は「もともと関心があったが、関心の度合いは変化しなかった」18.3%と「もともと関心はなかったし、関心の度合いも変化しなかった」56.1%を合わせると74.4%である。一方関心が高まったとする生徒は「もともと関心があったが、更に関心が高まった」7.9%と「もともと関心はなかったが、関心が高まった」17.0%を合わせると24.9%である。決して高い値とはいえないものの、生徒の関心のありように一定の効果があつたことは窺えよう。

関心の変化を「高まった」「変化しなかった」の2カテゴリーにまとめたうえで、性別、学校別、美術館訪問経験の有無別にその割合をみると（表5・6・7）、男子と女子では女子のほうが、学校別ではA高校→B高校→C高校→D高校の順で「高まった」と考える生徒が多くなっている。またある意味当然ではあるが、美術館訪問経験のある生徒のほうがない生徒よりも関心が「高まった」とする割合が多い。

表5 男女別の美術への関心の变化

	関心の度合いの変化		合 計	N
	高くなった	変化しなかった		
男 子	20.4%	79.6%	100.0%	401
女 子	32.5%	67.5%	100.0%	252
合 計	25.1%	74.9%	100.0%	653
カイ2乗検定	カイ2乗値12.029 有意確率0.001			

表6 学校別の美術への関心の变化

	関心の度合いの変化		合 計	N
	高くなった	変化しなかった		
A高校	35.2%	64.8%	100.0%	227
B高校	27.7%	72.3%	100.0%	65
C高校	18.6%	81.4%	100.0%	183
D高校	17.8%	82.2%	100.0%	180
合 計	25.0%	75.0%	100.0%	655
カイ2乗検定	カイ2乗値21.960 有意確率0.000			

表7 美術館訪問経験の有無別の美術への関心の变化

		関心の度合いの変化		合 計	N
		高くなった	変化しなかった		
美術館 訪問経験	あり	31.0%	69.0%	100.0%	387
	なし	16.4%	83.6%	100.0%	268
合 計		25.0%	75.0%	100.0%	655
カイ2乗検定	カイ2乗値21.960 有意確率0.000				

続いて男女別・美術館訪問経験の有無別に関心の变化をみたものが表8である。

表8 男女別・美術館訪問経験の有無別の美術への関心の变化

			関心の度合いの変化		合 計	N
			高くなった	変化しなかった		
男子	美術館 訪問経験	あり	28.3%	71.7%	100.0%	191
		なし	13.3%	86.7%	100.0%	210
	合 計		20.4%	79.6%	100.0%	401
カイ2乗検定	カイ2乗値13.722 有意確率0.000					
女子	美術館 訪問経験	あり	34.0%	66.0%	100.0%	194
		なし	27.6%	72.4%	100.0%	58
	合 計		32.5%	67.5%	100.0%	252
カイ2乗検定	カイ2乗値0.842 有意確率0.359					
合計	美術館訪 問経験	あり	31.2%	68.8%	100.0%	385
		なし	16.4%	83.6%	100.0%	268
	合 計		25.1%	74.9%	100.0%	653
カイ2乗検定	カイ2乗値18.281 有意確率0.000					

これによれば、男子については美術館訪問経験によって関心の度合いの変化に統計的に有意な差がみられる。他方女子については美術館訪問と関心の変化の間には有意な関係はみられない。表5のとおり、もともと関心の変化には男女差がみられるが、男子生徒においては女子生徒よりも美術館訪問が関心の変化に影響を与えていると考えられる。

図2のとおり、「もともと関心はなかったが、関心が高まった」と回答した生徒は17.0%である。これを「美術館効果」「まちなかアート効果」として高いとみるか低いとみるかは判断の分かれるところであろう。それでも美術館訪問経験が、相対的に美術への関心の低い男子生徒においてそれを高める傾向があると考えられるならば、やはり身近なところにある芸術の存在が彼ら彼女らの意識を変化させているといえるだろう。

(3)「アートによるまちづくり」への賛否

このように、現代美術館やまちなかアートの存在は、高校生の芸術への関心に少なからず影響をもたらしていると考えられる。それでは十和田市が進める「アートによるまちづくり」を、彼ら彼女らはどのようにみているのだろうか。表9・10は、男女別、学校別に今後の「アートによるまちづくり」の継続に対する賛否を示したものである。

「アートによるまちづくり」の継続への賛否は、全体では賛成・反対とも約50.0%で完全に拮抗している。

表9 男女別の「アートによるまちづくり」の継続への賛否

	「アートによるまちづくり」の継続		合 計	N
	賛成	反対		
男 子	43.6%	56.4%	100.0%	406
女 子	59.7%	40.3%	100.0%	253
合 計	49.8%	50.2%	100.0%	659
カイ2乗検定	カイ2乗値16.137 有意確率0.000			

表10 学校別の「アートによるまちづくり」の継続への賛否

	「アートによるまちづくり」の継続		合 計	N
	賛成	反対		
A高校	59.6%	40.4%	100.0%	230
B高校	57.6%	42.4%	100.0%	66
C高校	44.4%	55.6%	100.0%	187
D高校	40.8%	59.2%	100.0%	179
合 計	50.0%	50.0%	100.0%	662
カイ2乗検定	カイ2乗値18.375 有意確率0.000			

男女別では、男子生徒の支持が43.6%であるのに対し、女子では59.7%と高くなっている。学校別では、A高校59.6%、B高校57.6%、C高校44.4%、D高校40.8%となっている。これらは、先にみた芸術への関心の度合いの変化と似た傾向を示している。この「アートによるまちづくり」への賛否を規定する要因を、さらに掘り下げて検討してみることにはしたい。そこで性別の他に学校の種別（普通科・職業科）、部活動の種別（文化部・文化部以外）、美術館訪問回数、居住地（十和田市内・市外）、美術への関心の変化³（高くなった・変わらなかった）を独立変数としてロジスティック回帰分析を行った結果が表11である。

表11 「アートによるまちづくり」の継続支持の規定要因

	回帰係数	オッズ比	有意確率
女子ダミー	.182	1.200	
文化部ダミー	.293	1.341	
普通科ダミー	.402	1.495	+
市内ダミー	-.907	.404	***
関心の変化ダミー	1.392	4.025	***
美術館訪問回数	.170	1.185	**
(定数)	-.274		
N	562		
-2対数尤度	686.881		
Nagelkerke 決定係数	0.201		
尤度比のカイ2乗検定	カイ2乗値91.761	有意確率0.000	

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05 +p<0.10

これによれば、「アートによるまちづくり」に対する支持に影響を与えているのは、美術への関心の変化、居住地（十和田市内居住）、美術館訪問回数といった変数である。十和田市内在住の生徒にとっては、アートによるまちづくりは地元の身近な出来事であり、それゆえに相対的に意識に上ることが多いと考えられる。美術への関心の変化は、自らの認識の変化を肯定的に捉える彼ら彼女らにとって、自然と今後の「アートによるまちづくり」の継続への支持を生み出している。

ここではもうひとつの変数である美術館訪問回数に注目したい。美術館の訪問は、美術に対する関心と密接に結びついたものとして考えられる。しかし先にみた図1のように、最初の美術館訪問のきっかけは、「学校の行事」や「近くにできたから」「友人・知人に勧められたから」といった理由が上位を占め、「展示作品に興味があったから」「アートに興味があったから」といった理由はこれらに次ぐ位置にある。つまり彼ら彼女らは、少なくとも最初のきっかけにおいて

は、さほど主体的に美術館を訪れたわけではなさそうだが、ということである。それでも身近なところに美術館やまちなかアートが存在することによって、「アートによるまちづくり」の継続に対する支持が生まれているとすれば、一連の取り組みは地元の若い世代にも訴求力をもっているといえるだろう⁴。

4. まちとの関わり

(1) 中心商店街に行く理由

十和田市が進める「アートによるまちづくり」は、衰退が叫ばれて久しい中心市街地の活性化を目的とし、現代美術館を基点としてその効果を広く中心商店街にまで広げることが目的としている⁵。その意味で中心商店街は美術館をコアとしたアート空間のなかに位置し、同時にかねてからの生活・消費空間としての機能を持ち続けている。十和田市の高校生たちは、こうした中心商店街をどのように利用し、そしてどのように捉えているのだろうか。

以下では十和田市の中心商店街を図3の破線で囲まれたエリアとして捉え⁶、彼ら彼女らにとっての「場」としての位置づけを捉えていくことにする。

図3 十和田市の中心商店街の位置

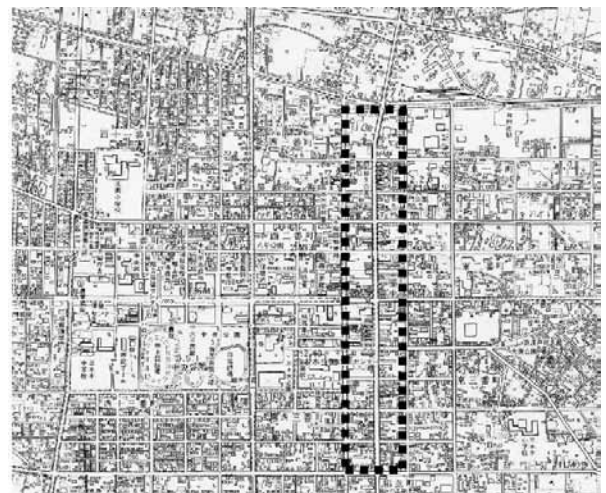


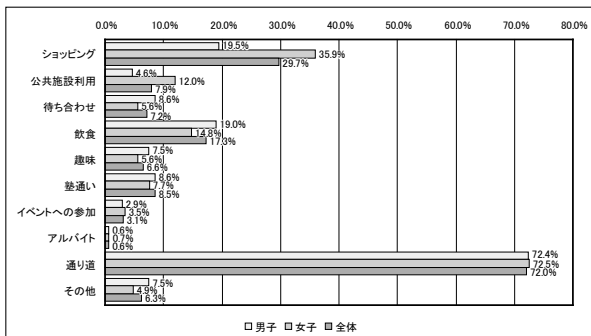
表12は、学校別に中心商店街を訪れる頻度を示したものである。全体では半数近く（48.2%）が中心商店街に行くと回答している。この傾向は学校の立地にも規定されており、中心商店街に近い位置にあるA高校では高く、逆に商店街から離れ、寄宿舎で生活する生徒もいるD高校の場合は全体の4分の1程度にとどまっている。頻度についてみると、月に11日以上中心商店街に行く生徒はA高校28.6%、B高校9.1%、C高校14.4%、D高校6.1%となっている。

表12 学校別の中心商店街の訪問頻度

	中心商店街に行く頻度（1か月あたり）						合計	N
	0日	1～2日	3～5日	6～10日	11～19日	20日以上		
A高校	37.4%	7.0%	16.7%	10.1%	5.7%	22.9%	100.0%	227
B高校	43.9%	13.6%	18.2%	15.2%	3.0%	6.1%	100.0%	66
C高校	50.0%	14.4%	11.2%	10.1%	4.3%	10.1%	100.0%	188
D高校	74.9%	7.8%	7.3%	3.9%	3.9%	2.2%	100.0%	179
合計	51.8%	10.0%	12.7%	8.9%	4.5%	12.0%	100.0%	660
カイ2乗検定	カイ2乗値93.667 有意確率0.000							

図4は、男女別の中心商店街を訪れる理由（複数回答）を示したものである。最も多い回答は「通り道」であり、全体で72.0%となっている。性別によって統計的に有意な差が認められるのは「ショッピング」と「公共施設利用」の2つのみである。前者については男子の19.5%に対し女子では35.9%が商店街に行く目的として挙げている。後者については男子4.6%に対して女子12.0%となっている。こうした傾向からは、中心商店街という空間利用に性別による異なった意味づけがあることが窺えよう。

図4 男女別の中心商店街を訪れる理由（複数回答）



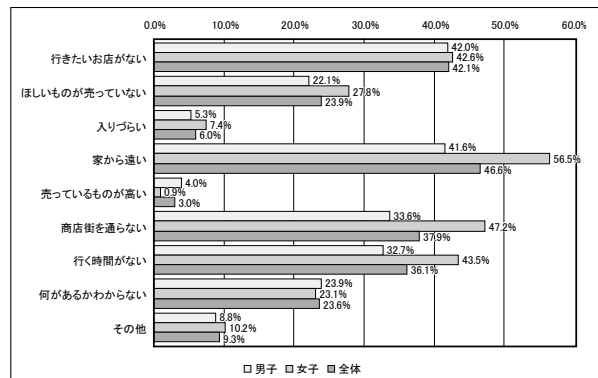
図表は省略するが、学校別に中心商店街を訪れる理由をみると、「通り道」は4つの学校を通して62%～76%の生徒が回答している。移動の際の経路として文字通り「通過する」というものである。これに次ぐのが「ショッピング」で、学校ごとでは20%～38%の生徒が回答している。この「ショッピング」のための来街が興味深いのは、学校の立地や中心商店街を訪れる頻度と直接関連していないように思われることである（学校別にみた場合、統計的に有意な差はみられない）。来街や訪問頻度を規定する学校の性格以外の要因が働いていることを窺わせる。次に「飲食」をみてみると、全体では17.3%、学校別では11%～19%であり、ここでも学校と「飲食」による商店街利用との間に統計的に有意な関連はみられなかった。学校別でみた場合、唯一統計的に有意な差がみられるのは「塾通い」であり、全体では8.5%であるのに対してA高校

では16.8%となっており、他の3高校の0%～2%という数値とは際だった違いをみせている。

他方、商店街に行かない理由を男女別に示したのが図5である。全体では、行かない理由として最も高い割合を占めるのは「家から遠い」46.6%であり、次いで「行きたいお店がない」42.1%、「商店街を通らない」37.9%、「行く時間がない」36.1%、「ほしいものが売っていない」23.9%である。

これらの理由のうち、「家から遠い」「商店街を通らない」「行く時間がない」については男子と女子で統計的に有意な差が認められた。

図5 男女別の中心商店街に行かない理由（複数回答）



ここでも図表は省略するが、学校別にみた場合には、回答に統計的に有意な差がみられるのは「行きたいお店がない」「ほしいものが売っていない」「家から遠い」の3つである。

これらから考えると、確かに「行きたいお店がない」「ほしいものが売っていない」といった、消費空間としての魅力の欠如は重要な要因であるといえるが、高校生にとってはむしろ日常の生活圏（通学路や自宅の位置）との距離や、部活動などによる多忙さといったことのほうが商店街に足が向かない要因としてより大きいように思われる。

(2) 中心商店街の変化

先にも触れたように、本稿の分析対象である高校生は、中学校1年生の時点で現代美術館の開館という地域の大きなイベントを経験している。美術館を基点として中心商店街を活性化するという意図に対して、実際のまちの変化を彼ら彼女らはどのように捉えているのだろうか。表13は、居住地別・男女別に美術館開館の前後の中心商店街の変化に対する認識を示したものである。変化に関する認識はほぼ3分されている。「変わった」(「大きく変わった」「少し変わった」の合計)は36.1%、「変わらない」(「あまり変わっていない」「全く変わっていない」の合計)は27.4%、「わからない」が36.4%である。

十和田市内在住の生徒においては、男女で変化に対する認識が大きく異なり、女子において「変わった」と捉える傾向が強いことがわかる。十和田市外居住の生徒においては、「わからない」がかなりの割合を占めるものの、やはり女子のほうが変化を感じていることがわかる。

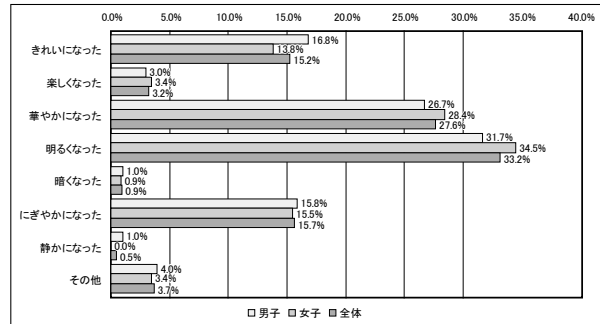
表13 居住地別・男女別の中心商店街の変化に対する認識

		街の雰囲気の変化			合計	N
		変わった	変わっていない	わからない		
十和田市内	男子	37.0%	34.7%	28.2%	100.0%	262
	女子	51.1%	31.3%	17.6%	100.0%	176
	合計	42.7%	33.3%	24.0%	100.0%	438
	カイ2乗検定	カイ2乗値10.258 有意確率0.006				
十和田市外	男子	12.7%	16.9%	70.4%	100.0%	142
	女子	42.1%	13.2%	44.7%	100.0%	76
	合計	22.9%	15.6%	61.5%	100.0%	218
	カイ2乗検定	カイ2乗値124.452 有意確率0.000				
合計	男子	28.5%	28.5%	43.1%	100.0%	404
	女子	48.4%	25.8%	25.8%	100.0%	252
	合計	36.1%	27.4%	36.4%	100.0%	656
	カイ2乗検定	カイ2乗値30.209 有意確率0.000				

ではまちの雰囲気はどのように変化したのか。図6は「変わった」と認識している生徒が捉えた変化の内容を男女別に示したものである(単一回答)。変化の捉え方には男子と女子で統計的に有意な差はなく、全体でみると「明るくなった」33.2%、「華やかになった」27.6%、「にぎやかになった」15.7%、「きれいになった」15.2%となっている。この傾向は居住地別(市内・市外)でみてもほぼ同様である。「明るさ」や「華やかさ」は、美術館と展示作品がもたらす色彩の印象を、「にぎやかさ」は美術館を訪れる人々の多さ

を、「きれいさ」は、現代美術そのものがもつイメージを象徴していると考えられ、それらがまち=中心商店街にも及んでいると捉えられているとみてよいだろう。

図6 男女別の変化の認識の内容



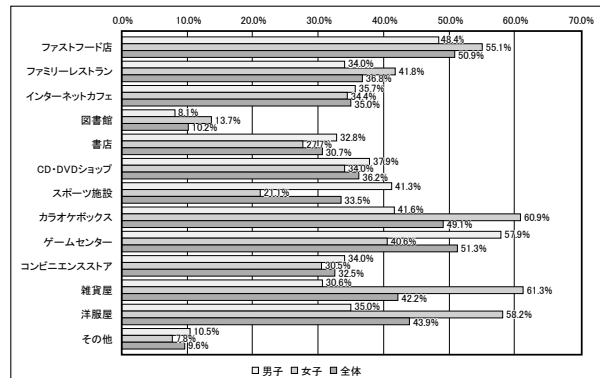
(3) 中心商店街に望むもの

現代美術館の開館を嚆矢とする「アートによるまちづくり」は、少なからぬ割合の高校生にとってまちを変える(た)ものと認識されている。それでは彼ら彼女らは中心商店街にどのような変化を求め、何を望んでいるのだろうか。

図7は高校生が中心商店街にあったらいいと考える店舗・施設(複数回答)を男女別に示したものである。全体でみると最も高い割合を占めるのは「ゲームセンター」51.3%、次いで「ファストフード店」50.9%、「カラオケボックス」49.1%、「洋服屋」43.9%、「雑貨屋」42.2%と続く。遊戯・飲食・消費の場所ということになるが、これらは友人とともに時間を過ごすことのできる場所でもある。要するに「たまり場」となる空間を求めていることがわかる。

これらの店舗・施設のうち、男子と女子で統計的に有意な差が表れるのは「ファミリーレストラン」「図書館」⁷「スポーツ施設」「カラオケボックス」「ゲーム

図7 男女別の商店街にあったらいいと考える店舗・施設(複数回答)

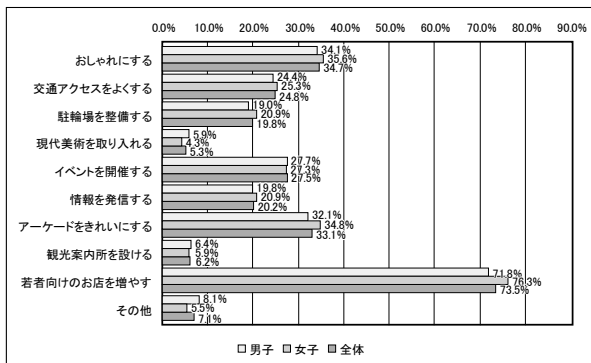


センター」「雑貨屋」「洋服屋」である。消費の場所（「雑貨屋」や「洋服屋」）は女子生徒が求める傾向が強く、対して遊戯やスポーツの場所（「スポーツ施設」「ゲームセンター」）は男子生徒が求める傾向がある。

高校生からみた、中心商店街を改善するために必要な方法（複数回答）について男女別に示したのが図8である。全体で最も高い割合を占めるのは「若者向けのお店を増やす」73.3%であり、「おしゃれにする」34.6%、「アーケードをきれいにする」33.3%、「イベントを開催する」27.4%、「交通アクセスを良くする」24.7%、「情報を発信する」20.1%、「駐輪場を整備する」19.7%と続く。いずれの項目についても男子と女子で統計的に有意な差はみられなかった。

高校生のニーズとして、「若者向けのお店を増やす」が高い割合を示すことは、先の商店街に行かない理由と合わせて考えると妥当な結果といえる。むしろここで注目したいのは、「おしゃれにする」「アーケードをきれいにする」である。これらはいずれも景観に関する改善を求めるものであり、まちの「見た目」が高校生にとっても重要なものとして位置づけられていることがわかる。

図8 男女別の中心商店街を改善するための方法（複数回答）



(4) 住み心地と将来の居住意思

最後に、中心商店街から十和田市全体に視点を広げて、その住み心地と将来の居住意思を捉えてみよう。表14は、十和田市内在住の生徒を対象に、男女別の住

表14 男女別の十和田市の住み心地に対する認識

	住み心地				合計	N
	とてもいい	まあまあいい	あまりよくない	非常によくない		
男子	15.8%	60.6%	19.3%	4.2%	100.0%	259
女子	11.9%	67.6%	18.2%	2.3%	100.0%	176
合計	14.3%	63.4%	18.9%	3.4%	100.0%	435
カイ2乗検定	カイ2乗値3.180 有意確率0.365					

み心地に対する認識を示したものである。全体でみると「とてもいい」「まあまあいい」の合計は77.7%と高く、男子と女子で有意な差もみられない。

次に表15は、男女別に将来の十和田市への居住意思の有無を示したものである。「住み続けたい」と考える生徒の割合は全体で47.5%であり、男女の差もほとんどない。

表15 男女別の将来の十和田市への居住意思の有無

	将来の居住意思		合計	N
	住み続けたい	住み続けたくはない		
男子	47.3%	52.7%	100.0%	258
女子	47.7%	52.3%	100.0%	174
合計	47.5%	52.5%	100.0%	432
カイ2乗検定	カイ2乗値0.007 有意確率0.933			

このような住み心地の感じ方と将来の居住意思の間にはどのような関係があるだろうか。表16は、男女別に両者の関係を示したものである。

表16 男女別・住み心地の感じ方別の将来の十和田市への居住意思の有無

	住み心地	感じ方	将来の居住意思		合計	N
			住み続けたい	住み続けたくはない		
男子	住み心地	よい	59.9%	40.1%	100.0%	197
		悪い	6.6%	93.4%	100.0%	61
	合計	47.3%	52.7%	100.0%	258	
カイ2乗検定			カイ2乗値53.167 有意確率0.000			
女子	住み心地	よい	57.2%	42.8%	100.0%	138
		悪い	11.1%	88.9%	100.0%	36
	合計	47.7%	52.3%	100.0%	174	
カイ2乗検定			カイ2乗値24.360 有意確率0.000			
合計	住み心地	よい	58.8%	41.2%	100.0%	335
		悪い	8.2%	91.8%	100.0%	97
	合計	47.5%	52.5%	100.0%	432	
カイ2乗検定			カイ2乗値77.110 有意確率0.000			

これによれば男女ともに「住み心地がいい」と考えている生徒においては、将来も「住み続けたい」と考える傾向が強いことがわかる。このように「住み心地のよさ」と「住み続けたい」という意思との間には関連があるが、それでも将来「出て行きたい」「出て行かざるを得ない」と考える生徒の割合は決して少なくはない。高校生活を送る地域に一定の愛着を感じながらも、他出を現実的なものとして捉えざるを得ない点は、他の多くの地方都市が共通して直面する課題である。

おわりに

本稿では、十和田市内の4つの高校の2年生を対象とした質問紙調査から、彼ら彼女らが市の進める「アートによるまちづくり」とどのように関わり、そしてそれをどのように受け止めているのか、また「アートによるまちづくり」の主たる場である中心商店街をどのように利用し、そしてそこに何を求めているのかについて考察してきた。以上の分析から明らかになった点として、次のようなことが挙げられる。

まず、アートと高校生との関わりについては、3つの点を指摘することができる。

第一に、現代美術館の存在は、学校の行事や授業をきっかけとする形で、地域の高校生に芸術に接する機会を提供しているということである。加えて「何となく」「暇つぶし」にも立ち寄れる場として、少なからぬ生徒が複数回の訪問を経験しており、アートを身近なものにしていると考えられる。

第二に、現代美術館やまちなかアート事業が、高校生たちの芸術への関心を高める役割を一定程度果たしているということである。比較的敷居の低いアートへの接触が、彼ら彼女らの関心を劇的に高めているとはいいがたい。しかしそれでもなお相対的に芸術への関心の低い男子生徒において、それを高めるような結果がみられることから、その効果は意義あるものといえるだろう。

第三に、美術館の訪問経験や芸術との関わりが、市が進める「アートによるまちづくり」の今後の継続に対して肯定的な意識を生み出していることが挙げられる。最初は必ずしもアートに対して主体的に関心を寄せていたわけではない彼ら彼女らにおいても、接点をもつことでまちづくりの方向性についての理解や支持が生まれているとみることができる。

次に、中心商店街やまちとの関わりについては、4つの点を指摘することができる。

第一に、高校生にとっての中心商店街利用の位置づけは、「通過する場所」というのが主たるものであり、消費や滞在（飲食を含む）のための場としての位置づけは相対的に低い、ということである。こうした背景には、消費の場としての魅力の欠如ばかりではなく、生活時間のなかで立ち寄るための時間がない、といった環境的な要因も働いていることが明らかになった。

第二に、現代美術館を基点とした「アートによるまちづくり」がもたらす中心商店街の変化は、彼ら彼女らにもある程度認識されている、ということである。

それは主として色彩や明度を基軸とした、景観の変化として捉えられている。

第三に、高校生が中心商店街に望むものは、「たまり場」となる空間である、ということである。これは彼ら彼女らにとっての商店街が「通過する場所」であるという実態の裏返しである。今後の改善策として「若者向けのお店を増やす」ことが挙げられているのは、現状においてそれらが大きく欠如していると感じられるからであろう。

第四に、十和田市に居住する多くの高校生は、地元を「住み心地がよい」と感じており、そうした生徒においては将来も引き続き「住み続けたい」と考える傾向が強いということである。地元に対する愛着の強さは、将来的な地域社会の担い手を多く抱えているということである。こうした若年人口をいかに地域に定着させることができるかは、まちづくりを含めた政策面での重要な課題であるといえる。

以上をふまえたうえで、今後さらに考えていくべき課題として、大人たちが提供する「アート」と、高校生たちが望む「若者向け」という嗜好性との接点をどのように形作っていくかということも挙げておきたい。両者を結びつけるキーワードは、「おしゃれ」「かわいい」「きれい」といったものである。これらは「アート」と「若者文化」に通底するものでありながら、消費社会の文脈においては、前者におけるそれらは後者に照らして高価なものとなる。したがって、消費社会におけるギャップをどのように埋めていくかが問われることになる。ひとつの方向性としては、購買力の乏しい若者をあえて切り捨ててしまう、という選択肢もあるかもしれない。しかし本稿としては、やはり、消費者としての若者を社会的・政策的にどのように取り込んでいくかについて考えることの必要性をあらためて提起したい。

註

¹ 本来であれば、この調査の結果と本稿の分析結果を対比したいところであるが、今回扱うことができなかった自由記述の分析と合わせ、別途あらためて比較を行いたい。

² 2014年6月末日現在。

³ この変数については、「もともと関心があったが、更に関心が高まった」「もともと関心はなかったが、関心が高まった」「関心が高くなった」に、「もともと関心があったが、関心の度合いは変化しなかった」「もともと関心はなかったし、関心の度合いも変化しなかった」を「関心に変化しなかった」とした。なお

「もともと関心があったが、関心は低くなった」（8ケース）は欠損値とした。

- ⁴ もっとも「アートによるまちづくり」の継続の賛否は、あくまでも半々であることに留意しなければならない。「アートによるまちづくり」に反対する意見のなかには、「お金の無駄遣い」といったものも多くみられる。こうした視点にも注意を払う必要がある。したがって賛否それぞれの理由については、自由記述の分析が必要不可欠であり、他日を期したい。
- ⁵ 十和田市現代美術館の英語名は「Towada Art Center」である。「Museum」ではなく「Center」としたところに、中心商店街までも含んだアート空間の広がりが意図されている。
- ⁶ ここでは中心商店街を、アーケードを中心に限定的に捉えており、「十和田市中心市街地活性化基本計画」の対象となる区域よりも狭いものとなっている。
- ⁷ 現在2015年3月の完成を目指して図書館や教育センターなどの機能を備えた十和田市教育プラザの建設が進められている。

力いただいた高等学校、十和田市役所、十和田市中心商店街の関係各位に心より感謝申し上げたい。

(2014.8.4 受理)

参考文献

- 澤田道夫, 2012, 「八代市における中心市街地活性化に関する研究——中高生に魅力あるアーケードとは」『アドミニストレーション』19(1), 89-118.
- 土屋佳子・濱田学昭, 2005, 「高校生の来街と意識調査による地方都市中心市街地の魅力に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』計画系(45), 517-520.
- 仲川秀樹, 2010, 『“おしゃれ”と“カワイイ”の社会学——酒田の街と都市の若者文化』学文社.
- 平川毅彦, 2012, 「高校生の余暇・購買行動と中心市街地の課題——新潟青陵高等学校2年次生徒へのアンケート調査結果から」『新潟青陵学会誌』5(1), 23-28.
- 弘前大学教育学部社会学研究室, 2014, 『アートのまちの高校生のライフスタイル——中心商店街・十和田市・芸術との関わりとイメージ』2012年度公民演習Ⅰ・Ⅱ(社会調査実習)成果報告書.
- 松田佳紀他, 2011, 「八代市中心市街地活性化について」『熊本大学政策研究』2, 121-130.
- 十和田市, 2013, 「十和田市中心市街地活性化基本計画」(2014年7月14日取得, <http://www.city.towada.lg.jp/docs/2012020100040/files/c5.pdf>).

謝辞

本稿の分析データである質問紙調査は、2012年度公民演習Ⅰ・Ⅱの一環として行われたものである。調査の実施にあたった当時の学生諸君ならびに調査にご協